

EAJ 中部通信 2016 No. 1

「中部支部設立号」

平成 28 年 12 月

中部支部として日本工学アカデミーのミッションに取り組んでいく第一歩として会員相互の情報交換・情報共有の場として「EAJ 中部通信」を発行することとなり、第一報を「中部支部設立号」として発信します。今号では、中部支部設立の趣旨や設立記念総会・講演会などを報告いたします。付録として、「中部支部設立総会資料」および「EAJ 活動概要」を添付します。（水谷法美幹事長）

1. 中部支部設立の経緯と今後の活動（林良嗣支部長）

11 月 23 日（水、祝）に名古屋大学減災館減災ホールにて、中部支部設立総会・記念講演会が開催され、日本工学アカデミーに北海道・東北支部、九州支部について 3 番目の支部が誕生しました。総会にて支部長に指名されました林良嗣でございます。「EAJ 中部通信」第 1 号を発行するに際し、設立経緯と今後の活動方針について述べさせていただきます。

支部設立については、2 年を超える産学からの意見集約を経て、中部支部内規が 8 月本部理事会において承認された後、支部設立準備会が理事の林を世話人として組織され、準備が進められ当日を迎えて、支部が設立されるに至りました。

添付された総会資料のとおり、「日本工学アカデミー中部支部設立趣意書」を作成しましたので、ぜひお読みいただければと思います。ここに書かれているように、中部地区は、多くのノーベル賞受賞者を輩出するなど世界屈指の研究を進める大学や研究機関、世界最高水準の技術を生み出している製造業や交通基幹産業を擁しています。また、アカデミー会員が毎年個別に招いている多くの外国のエンジニア、研究者、起業家や政治家は、招聘者の会員が知るのみではないか？中部支部の結成は、アカデミー会員が中部の地に居ながらにして、そこに存在する知られざる素晴らしい価値を知り触発される機会を得るとともに、持てる価値を社会還元するために大いに意義あることと考えます。

これを実践するために、当面の支部企画としては、1) 会員、国内非会員によるエンジニアリングにおける話題のテーマについての講演会・シンポジウム、2) 世界の産官学のリーダーとして活動しているローマクラブメンバーなどの来日に合わせた講演会、3) 学校などへの会員による出前講義、4) 特定テーマについて会員の興味が集約された場合にはタスクフォースを組んで議論を進め提言書を出す、などを考えています。

1)、2)については、「EAJ 中部レクチャー」の名称でスタートします。後出の2.4節には、3月11日(土)に富山県立大学で開催される第1回「ノーベル賞 青色LED 実用化までの道のり」(講師:太田光一会員)とともに、今後の候補となるテーマ例が示されています。会員諸賢からのご提案を大いに歓迎いたします。

中部支部では支部内に理事会ではなく、種々の企画提案などをする運営委員会を組織することが一つの特徴となっています。そのメンバーは、添付の資料(運営委員紹介表をご覧ください)に示すように、ユニークな大学作りで著名な学長経験者、ハイブリッドの父と呼ばれる技術者、世界100人で組織されるローマクラブのフルメンバーなど、学界、産業界からの多彩な顔ぶれで構成されています。

總會当日現在、中部支部に属する会員数は45名です。これは、北海道・東北支部の98名に比べ、非常に小さく、会員の皆さんに勧誘をお願いしたいと思います。その際、添付の「日本工学アカデミー中部支部設立趣意書」を配布いただくと理解が進みます。

発足間もない中部支部ですが、選出された副支部長、幹事長、運営委員会委員にご助力をいただきながら、会員の皆さんから頂くご意見、アイデアを集約し、魅力的な活動を展開していきたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

2. 中部支部設立記念行事報告(水谷法美幹事長)

2-1 設立總會

中部支部設立總會では、最初に日本工学アカデミー阿部博之会長から、学術、産業の先導地域としての中部地区からの支部誕生への強い期待が述べられました。引き続き、来賓の経済産業省中部経済産業局・波多野淳彦局長、愛知県産業労働部・大野博技監、一般社団法人中部経済連合会・小川正樹専務理事から祝辞をいただきました。いずれもものづくり産業の中核的な地域である中部地区での工学アカデミーへの期待が述べられました。なお、来賓の方々への祝辞の依頼の折に各事務方からも期待の声や、設立後の連携への関心もいただくなど、期待の大きさを感じました。

ついで、中部支部設立の趣意書と経緯が説明され、本部承認済みの中部支部内規の追認と中部支部運営委員会委員の承認がなされた。そして、初代の支部長に林良嗣(中部大学教授)、副支部長に石塚勝(富山県立大学学長)、太田光一(豊田合成(株)特任顧問)、原邦彦(豊橋技術科学大学副学長)、幹事長に水谷法美(名古屋大学教授)の各会員が選任されました。

さらに、日本工学アカデミー創設期からのメンバーでLED開発によりノーベル物理学賞を受賞し、学術と社会への多大な貢献のあった赤崎勇会員(名城大学名誉教授)と、自動車関連産業のリーダーであり中部地区のアカデミー活動に多大な尽力と貢献のあった石丸典生会員(元デンソー会長)に支部名誉顧問が委嘱されました。これにて支部總會は閉会し、中部支部が正式に発足しました。



阿部裕之会長



波多野淳彦中部経産局長



大野博愛知県産業労働部技監



小川正樹中部経済連合会専務理事



林良嗣会員（中部支部長）



山本尚会員（記念講演者）

2-2 記念講演

記念総会に続き支部設立記念講演が、会員外の方々にも入っていただき行われました。講演会は、日本化学会会長で化学界の最高賞であるロジャー・アダムス賞の受賞が決まるなど、多数の世界各国の重要賞の受賞者である山本尚会員（中部大学分子性触媒研究センター長・総合工学研究所長）から「破壊的イノベーションとしての触媒化学」と題して行われました。イノベーションは「破壊的イノベーション」と「持続的イノベーション」に分けられ、そのうち破壊的イノベーションとは既存の科学技術や社会制度を破壊し、全く新しいシステムに塗り替えることができるイノベーションであり、これによってそれまでの社会の在り方を一変させるものであるとの論が展開されました。それを実現するための取り組みや考え方などが非常に詳しく講演され、出席者一同が、深い感銘を受けました。

2-3 祝賀会

会場を学内のレストラン「シェジロー」に移し、記念祝賀会が開催された。祝賀会では、愛知県・大村秀章知事および名古屋工業大学・鶴飼裕之学長から、日本工学アカデミーへの強い期待を含めた祝辞をいただいた後、石丸典夫会員（支部名誉顧問）によって中部地区のアカデミー活動を振り返るスピーチを伴う乾杯の発声により始まり、1時間半に亘って歓談が続き、会員相互および行政、企業、経済団体との交流を深めました。



大村秀章愛知県知事 鶴飼裕之名古屋工業大学学長 石丸典生支部名誉顧問



祝賀会の様子

3. 行事企画（原邦彦副支部長）

中部支部に特長的な先進技術や思想をアカデミー会員のみならず、広く研究者、学生、一般市民の方々にも共有していただくために、下記に例示するような話題について、講演会やシンポジウム等、適時適切な企画を実現して行きます。その最初の企画の枠組みとして、「EAJ 中部レクチャー」を下記のようにスタートいたします。第1回は、赤崎勇教授、天野教授とともにノーベル賞受賞対象となった青色LEDの研究に長年取り組んできた豊田合成（株）特任顧問の太田光一日本工学アカデミー理事に登壇いただき、知られていない開発のエピソードを交えてその実用化までの道のりを語っていただくことになりました。

会員の皆様からも、適切なテーマと講師をご提案いただければ、誠に幸いです。

3-1 イベント企画事例（1）以外は、すべてテーマ案の段階です）

- 1) 「ノーベル賞 青色LED 実用化までの道のり」講演会（太田光一講師）（実施決定）

- 2) 「活躍する中部の女性エンジニア：その気概と環境」講演・シンポジウム
- 3) 「地震災害からいかにして身を守るか、被災した生産現場をV字復旧させるための日ごろの準備とは」講演・シンポジウム・見学会
- 4) 「ミニマルエンジニアリングとミニマル社会」
(ポロシャツとジーンズで半導体を作る 究極のモノづくり) 講演・シンポジウム
- 5) 「トリリオンセンサーとビッグデータ」講演・シンポジウム
- 6) 「長寿社会と生き甲斐：工学は何をすべきか」講演・シンポジウム
- 7) 「よくわかる人工知能：現場で働く賢いロボットたち」中高生向け講演会・見学会
- 8) 「弱いロボットが人を救う」
(22世紀型ロボットの姿：関係論的ロボット) 講演会・シンポジウム
- 9) 「電池革命 全固体2次電池が世界を変える」講演会
- 10) 「プラズマが牽引する農工革命、医療革命、水産革命」講演会・見学会
- 11) 「これからの工学教育に何が必要か」講演会・見学会
- 12) 「分子科学と工学の接近」講演会・見学会
- 13) 「データサイエンスが牽引する新しい工学の姿」講演会・シンポジウム

3-2 第1回 「EAJ 中部レクチャー」開催ご案内

- 1) 開催日時 2017年3月11日(土)
- 2) 会場 富山県立大学・大講義室
- 3) 開催組織 主催：日本工学アカデミー中部支部
共催：富山県立大学、富山県立大学研究協力会
- 4) プログラム
15:00～15:10
挨拶：林 良嗣支部長(中部大学教授)
15:10～16:40
講演「ノーベル賞 青色LED 実用化までの道のり」：
太田光一会員(豊田合成(株)特任顧問、日本工学アカデミー理事)
- 5) 講演要旨：
 - ① 講演者が経験したノーベル賞授賞式の現場レポート
 - ② 受賞の対象となった青色LEDのブレークスルー技術の本質
 - ③ 自動車のゴム・樹脂部品メーカーが半導体の世界に入った理由
 - ④ 省エネ照明に繋がる輝度向上技術
 - ⑤ 産学官連携の重要性と企業の役割
 - ⑥ 6年に及ぶ青色LED特許訴訟の体験談
 - ⑦ 事例を交えた特許の重要性
 - ⑧ 窒化ガリウムの半導体材料としての今後の展望 等

6) 懇親会

16:50~18:00 於：教職員コモン

会費：3,000円

7) 富山県立大学へのアクセス

金沢駅で、あいの風とやま鉄道に乗り換え（46分）、小杉駅下車。

富山駅で、あいの風とやま鉄道に乗り換え（10分）、小杉駅下車。

小杉駅南口から徒歩約20分（約2Km）、

又は射水市コミュニティバス「14.小杉駅・太閤山線」に乗車約6分。

射水市コミュニティバスは、小杉駅南口を毎時5分発と30分発があります(200円)。

富山県立大学前下車。

小杉I.Cから車で約5分。



8) 参加お申し込み

ご氏名、ご所属、ご連絡先を添えて、下記あてE-MAILにて2017年3月6日までにお申込みください。

ご氏名：

ご所属先：

ご連絡先：

E-mail：

問い合わせ先&申し込み先

富山県立大学 正川芹菜（しょうがわ せりな）

E-mail: shogawa@pu-toyama.ac.jp

4. 産業界への働きかけ (太田副支部長)

日本工学アカデミーは、そのネーミングのイメージから、アカデミックな分野、例えば大学や研究機関等で活躍されている方々が会員になるという傾向が強いと思われがちです。しかし、私自身、産業界サイドですが、会員として受け入れていただきました。ただ、そのような方々の比率が低いことは否めません。

そこで、この中部支部設立を機に、

- ① 産業界への日本工学アカデミーの認知活動
- ② 産業界からの会員比率向上活動

を積極的に推進していきたいと思えます。

- ① については、例えば、支部活動として実施する「EAJ 中部レクチャー」において産業界の方が聴講しやすいテーマ設定としたり、産業界からの講師を招聘することにより、多くの方々に参加していただく
- ② については、上記を通じて EAJ の活動を理解いただくことや、会員は企業内の研究者のみならず、例えば、研究結果を実用化に結びつけることに尽力したエンジニアやマネジメント関係者の方々等も対象であることを認知していただく等の具体的な行動に展開したいと思えます。更には、私自身を含め、各運営委員、会員の方々が、企業訪問等を行い、日本工学アカデミー中部支部の活性化に努めていきたいと思えます。

皆様のご協力のほどよろしくお願ひします。

5. 北陸地区での活動 (石塚副支部長)

日本工学アカデミーは、北陸地区の会員数が多くないことから、今まで特に主催の行事もなく、その知名度は高くありません。このたびの中部支部設立に伴い、3-2 に紹介があるように、2017年3月11日(土)に第1回「EAJ 中部レクチャー」の富山県立大学での開催を企画しました。この際、EAJの知名度拡大を最大目的にしましたが、太田光一会員による、「ノーベル賞 青色 LED 実用化までの道のり」という、非会員にとっても非常に魅力的な講演を企画できました。そこで、今回は以下のように聴講対象を拡大しました。

- ① 富山県立大学の教職員と学生にレクチャーを公開する。
- ② 富山県内の企業約200社で構成する、富山県立大学研究協力会(会長:杉野スギノマシン社長)の会員にも開催案内を送る。

これにより、産業界との連携にも力を入れていきたいと考えています。

当然このようなことは石川県、福井県もそれぞれ独自の企画ができると思えます。今回は第一歩ですが、この種の行事を通じて、EAJの活性化を図り、会員の増加にもつなげていきたいと思えますので、皆様のご協力のほどよろしくお願ひします。

(付録)

公益社団法人 日本工学アカデミー
(The Engineering Academy of Japan)

中部支部設立記念総会資料

平成28年11月23日(水)

次 第

報告事項

1. 中部支部設立の趣旨 (資料-1)

審議事項

1. 中部支部内規の承認 (資料-2)
2. 運営委員会委員の選任 (資料-3)
3. 支部長、副支部長、幹事長の選任 (資料-4)

支部長挨拶

4. 支部名誉顧問の委嘱 (資料-4)

日本工学アカデミー中部支部 設立趣意書

日本は戦後大きな経済発展を遂げて GDP 世界第2位の地位を占め、科学技術、産業両面で世界に対して存在感を示してきた。しかし今日では、社会は少子高齢化と人口減少が進み、経済も成熟段階に入って規模では新興国を下回り、それだけでは存在感は得られなくなっている。この時期に、日本の発展段階を再認識し、先進国、開発途上国に対して今日の立ち位置を確立し、尊重される国であり続けることは極めて重要なことである。

中部地域は21世紀に入って以降、基礎科学から応用分野まで大学および企業から8名のノーベル賞受賞者を輩出するなど、わが国でも屈指の高い研究レベルにある。一方産業では、製造業や交通基幹産業の中核機能が立地し、精緻で品質が極めて高く、安全で正確かつ低排出の運行を行う自動車、鉄道、航空機など、世界でも最高水準の技術が育ってきている。さらに、この地域では、バイオセンシングに関する先端技術を巧みに活用して世界的にも稀有な長寿医療研究を行っている国立研究開発法人、光に特化して世界市場を席捲している先端半導体・機器メーカー、世界標準としてグローバルに応用展開されている画期的な情報コードの発明企業、人間・ロボット共生に関する全く新しい概念を提唱している大学などの多くの創造的機関が、22世紀を見つめて新しい価値の創造に日々活動を続けている。

これらはそれ自身が、世界に誇るべきものではあるが、日本が欧米から学び追い越してきたように、個別の技術はいつか追いつき、追い越され、移転する。しかし、この地で培われた技術文化のシステムとして生まれた社会的価値は、日本、中部に独特な文化の中で培われたものであり、成熟段階に入った日本のエンジニアが次世代に受け継いで発展させ、広く世界にその便益をもたらすべきである。時代と国を超えた技術文化システムの社会的価値の継承は、エンジニアが一般市民や他国から重んじられ、ひいては日本が世界から尊敬される

国であり続ける源になろう。

日本工学アカデミーは、わが国の工学及び科学技術全般の発展に寄与することを目的として、これら分野並びにこれらと密接に関連する分野において、顕著な実績と広範な識見を持った指導的立場の会員により結成された、非営利、公益を目的とした民間団体である。

エンジニアがどのような役割を果たすべきかを考える時、アカデミー会員が互いに学び合い、また、その知恵を背景にある文化とともに取りまとめて他者に共有され継承していくことは、重要である。しかし、近代国家の社会経済と産業の基礎を築き、次世代の私たちに施してくれた明治、大正、昭和初期の先人たちに比べて、現世代はその恩恵に浴し経済的繁栄を謳歌したにもかかわらず、自らの役割の認識と努力を大きく欠いていると言わざるを得ない。

鑑みるに、アカデミー会員が毎年個別に招いている多くの外国のエンジニア、研究者、起業家や政治家は、招聘者の会員が知るのみではないか？世界でも最高水準の産業を擁する中部という場で、多くのエンジニア、市民、外国の人々と意見を交わし、会員相互にも研鑽を積んで、そこで生まれてくる価値が地域社会や他国に共有されて役に立つことは、成熟期に入った日本、とりわけ様々な分野で優れた実績と識見を持ったアカデミー会員の使命と考えるべきであり、これにより日本が尊敬される国であり続けることにいささかでも貢献できれば素晴らしいことである。

このような背景と考えから、中部支部の結成は、アカデミー会員が中部の地に居ながらにして、そこに存在する知られざる素晴らしい価値を知り触発される機会を得るとともに、持てる価値を社会還元するために大いに意義あることと考える。

2016年11月23日

公益社団法人日本工学アカデミー中部支部内規

第1章 総則

第1条 公益社団法人日本工学アカデミー（以下、アカデミーという）中部支部（以下、本支部という）の組織及び運営については、アカデミー定款等アカデミーの定めるもののほか、本内規の定めるところによる。

第2条 本支部は、愛知、石川、岐阜、静岡、富山、長野、福井、三重に係するアカデミー会員をもって組織する。

第2章 目的及び事業

第3条 本支部は、アカデミーの設立主旨である日本の工学・科学技術全般の発展に寄与するとともに、科学技術に関わる産学官の指導的立場にある者の団体であることを基盤として、本支部会員への情報や交流の場の提供ならびに地域社会に対する啓発活動に寄与し、併せて本支部会員相互の協調と親睦を図ることを目的とする。

第4条 本支部は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1) アカデミー会長から付託された事業、
- 2) 講演会・研究発表会・講習会等の開催、
- 3) その他、目的を達成するための事業

第3章 支部役員等

第5条 本支部に次の役員等をおく。

- 1) 支部長 1名
- 2) 副支部長 3名以内
- 3) 支部運営委員 10名程度
- 4) 名誉顧問、支部長補佐を置くことができる。

(役割)

第6条 支部長は、本支部の活動を総理し、本支部を代表する。

第7条 副支部長は、支部長の任務を補佐する。

第8条 支部運営委員会は、支部の意思決定に関わる支部長の諮問に応え、本支部の活動を企画・実施するとともに、アカデミー活動の分担を通して、アカデミー全体に寄与する役割を担う。

(任期)

第9条 支部長及び副支部長の任期は1期2年とし、再任を可とする。

第10条 支部運営委員の任期は1期2年とし、再任を可とする。

第4章 支部長・副支部長の選任

第11条 支部長は、支部運営委員会構成員の推薦により選任する。

第12条 支部長は、必要に応じて運営委員の中から副支部長3名以内を、運営委員会の承認を得て選任することができる。

第13条 支部長は、運営委員を会員の中から指名する。

2. 支部長は、名誉顧問を会員の中から指名することができる。

第5章 支部運営委員会

第14条 支部運営委員会は、支部長、副支部長及び支部運営委員を構成員とする。

第15条 支部運営委員会は、支部長が召集し、支部長が議長となる。

2. 支部運営委員会は、必要に応じて開催する。
3. 支部運営委員会には、支部長が認めた会員は出席できる。

第6章 事業報告・事業計画等

第16条 支部長は、会計年度終了後速やかに事業報告及び収支報告書を作成し、本部監査を受けた上で、支部運営委員会の承認を得なければならない。

第17条 支部長は、毎年度末までに、次年度の事業計画及び収支予算案を作成し、支部運営委員会の承認を得なければならない。

2. 支部収支予算の総額は、本支部からの申請を受けて本部理事会と本部総会の議を経て決定される。

第7章 補則

第18条 本内規は、本支部運営委員会の3分の2以上の議決を経て変更することができる。

第19条 本内規は、平成28年11月23日より実施する。

以上

公益社団法人日本工学アカデミー 中部支部運営委員会委員 (案)

	氏名	所属等	備考
1	石川 憲一	金沢工業大学名誉学長・教授	「教育付加価値日本一」を目指した大学改革の主導者
2	石塚 勝	富山県立大学学長	(株)東芝 研究開発センター元研究主幹
3	太田 光一	豊田合成(株)特任顧問	赤崎教授との共同開発による青色LED事業責任者
4	川合 眞紀	自然科学研究機構分子科学研究所長	東京大学新領域創成科学研究科特任教授、日本学術会議会員、前国立研究開発法人理化学研究所理事
5	菊池 昇	(株)豊田中央研究所代表取締役所長	ミシガン大学名誉教授、80年代米大学大改革者デューダーシュタット学長の補佐役
6	林 良嗣	中部大学総合工学研究所・教授	ローマクラブ・フルメンバー、WCTRS(世界交通学会)会長
7	原 邦彦	豊橋技術科学大学副学長	元デンソー取締役基礎研究所所長、 元コンポン研究所取締役副所長
8	福和 伸夫	名古屋大学減災連携研究センター長・教授	名古屋大学環境学研究科元副研究科長
9	松井 信行	中部大学理事長付特任教授	名古屋工業大学元学長、愛知教育大学元監事
10	水谷 法美	名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻・教授	名古屋大学工学研究科元副研究科長
11	八重樫武久	(株)コーディア代表取締役社長	元トヨタ自動車(株)理事、業界ではハイブリッドの父と呼ばれる
12	八嶋 厚	岐阜大学工学部社会基盤工学科・教授	岐阜大学元理事・副学長
13	山本 尚	中部大学分子性触媒研究センター長・総合工学研究所長	シカゴ大学・名古屋大学名誉教授、日本化学会会長
14	山脇 道夫	福井大学附属国際原子力工学研究所・参与	東京大学名誉教授、原子力産業会議原子力システム研究懇話会運営委員長

(五十音順)

支部長・副支部長・幹事長の選任

1. 支部長候補者

林良嗣 理事（中部大学総合工学研究所教授）

2. 副支部長候補者

石塚 勝 会員（富山県立大学学長）

太田 光一 理事（豊田合成㈱特任顧問）

原 邦彦 会員（豊橋技術科学大学副学長）

3. 幹事長候補者

水谷 法美 会員（名古屋大学大学院工学研究科教授）

支部名誉顧問の委嘱

1. 名誉顧問候補者

赤崎 勇 会員（名城大学理工学研究科終身教授）

石丸 典生 会員（一般社団法人愛知県発明協会会長）

日本工学アカデミー中部支部特別講演

山本尚 中部大学教授・日本化学会会長

「破壊的イノベーションとしての触媒化学」

講演要旨

イノベーションは「破壊的イノベーション」と「持続的イノベーション」に分けられる。破壊的イノベーションとは既存の科学技術や社会制度を破壊し、全く新しいシステムに塗り替えることができるイノベーションであり、これによってそれまでの社会の在り方を一変させるものである。

今世紀に入って、当量反応であった化学プロセスは、そのほとんどが触媒反応に塗り替えられている。触媒は化学における典型的な破壊的イノベーションであり、文字通り旧来の化学を塗り替えている。触媒を駆使した化学産業は、さらにフロー・システムを導入し、化学工場の景色までもが一変している。

講演ではそうした触媒が起こしつつある世界的な化学イノベーションと、それに対する山本教授の試みが紹介される。

講演者 山本尚教授 略歴

所属

中部大学分子性触媒センター長 中部大学総合工学研究所長 教授

学歴

昭和42年3月 京都大学工学部工業化学科卒
昭和46年3月 米国ハーバード大学大学院博士課程修了
学位 Ph.D.

職歴

昭和46年6月 東レ株式会社基礎研究所研究員
昭和47年4月 京都大学工学部助手
昭和51年10月 同大学講師
昭和52年9月 ハワイ大学准教授
昭和55年4月 名古屋大学工学部助教授
昭和58年4月 同大学教授
(平成12年4月 同大学 情報メディア教育センター長)
(平成15年4月 名古屋大学名誉教授)
平成14年7月 シカゴ大学化学教室教授
平成24年4月 中部大学教授
(総合工学研究所長、分子性触媒研究センター長)
(平成24年7月 シカゴ大学名誉教授)

専門分野

有機化学、生物有機化学、有機金属化学、天然物合成

研究テーマ

酸触媒の開発、不斉酸化触媒の開発、新しいリガンド設計等

受賞歴

日本化学会進歩賞(昭和52年4月)、IBM科学賞(昭和63年10月)、服部報公賞(平成3年10月)、中日文化賞(平成4年5月)、スイス連邦工科大学プレログメダル(平成5年11月)、日本化学会賞(平成7年3月)、東レ科学技術賞(平成9年3月)、ハーバード大学ティシュラー賞(平成10年4月)、フランス化学賞(平成14年1月)、テトラヘドロンチェアー賞(平成14年7月)、紫綬褒章(平成14年11月)、モレキュラーキラリティー賞(平成15年10月)、アメリカ科学会、AAS、フェロー(平成15年10月)、山田賞(平成16年10月)、テトラヘドロン賞(平成18年)、チーグラー賞(平成18年11月)、日本学士院賞(平成19年6月)、フンボルト研究賞(平成19年)、日本化学会名誉会員(平成20年4月)、インド化学研究院フェロー(平成20年)、有機合成化学協会特別賞(平成21年1月)、アメリカ化学会賞創造賞(平成21年4月)、アメリカ学士院会員(平成23年9月)、野依賞(平成24年2月)、藤原賞(平成24年6月)、米国ロジャー・アダムス賞(平成29年4月予定)
日本工学教育賞業績賞「高度総合工学創造実験による創造性教育の実践」(平成14年7月19日)

天野浩先生

工学アカデミー中部支部設立総会へのメッセージ

天野です。このたびは日本工学アカデミー 中部支部設立、誠におめでとうございます。当日は他用があり、どうしても外すことが出来ず、申し訳ありません。

ここ中部地区は、日本の工業を支えている最も重要な地域の一つであり、中部支部の設立は今後の日本全体の工学・科学の方向性を定めるために重要な布石となると思います。

我々現代人の活動が、未来の世代にとって負の遺産とならないようにするために、国や政府とは異なる立場から社会に進言する組織として、工学アカデミーの果たすべき責任は極めて重いと思います。イギリス、アメリカなど、世界が変革を求める中、我々はどうのように行動すべきか、日本工学アカデミー中部支部がその議論の中心的な場となることを祈念しております。

天野

〒464-8603

名古屋市千種区不老町 C3-1

名古屋大学未来材料・システム研究所
未来エレクトロニクス集積研究センター
センター長・教授 天野 浩 工学博士